

ルボ

コロナ後遺症 下

「コロナ後遺症の激痛の中で過ごす毎日は、永遠のように感じられ、精神的に」たえた。数ヵ月後、出口がないように思えた状況に改善の兆しが見えた。役立ったとみられるのは「慢性上咽頭炎」の治療だ。

日本病巣疾患研究会の堀田修理事長によると、後遺症患者の多くが重度の慢性上咽頭炎という。ウイルス感染などにより、鼻と喉の境で炎症を起こして慢性化するが、うつ血状態となり、脳機能が低下痛。处置後は短時間だけだが、

して自律神経障害などを引き起すと考えられている。

治療は、塩化亜鉛溶液を浸

した綿棒を鼻や喉から突っ込み、喉部を「すって亜鉛の殺

菌作用で上咽頭のうつ血状態を解消し、炎症を和らげる。

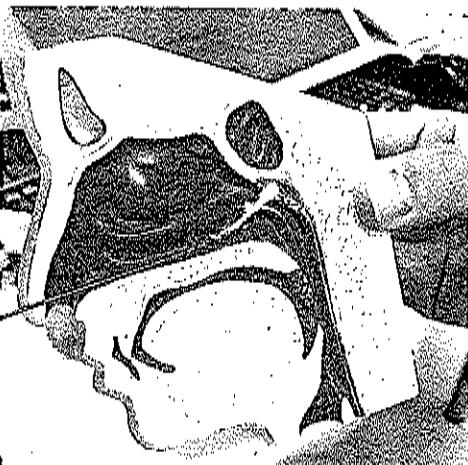
上咽頭擦過療法（EAT）と呼ばれ、記者も70回以上受けた。通いだした当初は後頭部を鈍器で殴られるような激

過酷な治療、復職は絶望

感染から1年不調続く



上咽頭擦過療法（EAT）を受ける記者=
2021年7月6日、東京都練馬区



上咽頭擦過療法（EAT）は、綿棒を突っ込み上咽頭をすくい=2021年7月30日、東京都練馬区

前よりやべて復職。ヒラハタクリニックの平畠光一医師からは「なるべく負担がかからない方法で」とアドバイスされた。職場の理解を得てテレワークを始めるなど、初日から倦怠感がぶり返した。以前と違って休めば回復するが、急激に悪化する不安を抱えてしま、綱渡りの日々が今も続く。以前の自分を取り戻せる日は、いつか来るのだろうか。昨年末、不調の相談のため、コロナの後遺症外来がある国立精神・神経医療研究センター（東京）を訪れた。診察した佐藤和貴郎医師は「感染か

頭がすつきりした。何より改善の手がかりを得たのがうれしく、通い続けた。

昨年8月下旬には日常生活上の問題はなくなっていた。

そこで仕事復帰を視野に数時間の取材に2日携わった。直後から再び体調が悪化。短時間の仕事もできない現実と、思い通りにならない体に自己嫌悪に陥った。

日本でもオミクロン株が広がっている。重症化リスクは比較的低いとの指摘もあるが、油断しないでほしい。コロナの症状はたいしたことがなくても、深刻な後遺症に苦しむ人は、記者のようにならざる。

再び安静を心がけ、11月下